

平成25年 新年のご挨拶



浦添市長 儀間 光男



浦添市議会議員 下地 恵典

新年明けましておめでとございます。市民の皆さまにおかれましては、平成25年の清々しい新年を健やかに迎えのこと心からお慶び申し上げます。広報うらそえを手に取り、昨年一年を振り返りますと、児童、生徒の皆さんが、文化、芸術、スポーツなどの各分野において活躍され、紙面を飾られたのが大変印象的でありました。また、うれしいニュースとして、当山の石畳道並びに安波茶橋が「中頭方西海道及び普天満参詣道」として国の史跡指定を受けました。このように、広報うらそえを通して市民の皆さまと多くの喜びを分かち合うことができましたこと

は大変素晴らしいことであり、今年もまた、たくさん喜びを、市民の皆さまにお伝えしたいと願っております。本市は、これまで取り組んで参りました「ひとづくり」「ものづくり」「まちづくり」を一層推し進める一方で、今春には、スーパーコミュニケーションスクールを開学し、来るべきグローバル時代を担う人材育成に力を注ぐなど、新しい分野へのチャレンジも積極的に行って参ります。本年も、市民の皆さまの温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成25年が市民の皆さまにとりまして、心から幸せを享受できる年となりますことを祈念申し上げます。新年のご挨拶と致します。

さて、迎えました平成25年も、本市議会は、市当局と連携を図りながら、市民が安心して暮らせる、元気のあるまち浦添となりますよう、活発な議会活動を展開し、議決機関としての責務に全力で取り組んでいく所存であります。

結びに、皆さまのこの一年が実り多い年となりますよう心から祈念申し上げます。新年のご挨拶と致します。

市民の皆さま、明けましておめでとうございます。謹んでお慶び申し上げます。昨年は新たな沖縄振興として、沖縄21世紀ビジョンが策定されました。本市におきましても、一括交付金を活用した事業が数多く着手されていることは、誠に喜ばしい限りであり、「太陽とみどりにあふれた国際性ゆたかな文化都市」の実現に資するものと存じます。そして、本市議会におきましては、第11期市議会議員の最終年度として、市政の発展と市民福祉の向上のため、様々な課題の解決に向けた議会活動を積極的に展開してまいりました。

2012 うらそえYA文芸賞

YA世代の若き才能 文学8作品が受賞



YAとはヤングアダルトの略で、13歳から22歳までの世代をいいます。

「うらそえYA文芸賞」はYA世代を対象に文学作品を募集するものです。募集作品は、短編小説と詩で、今年度は短編小説部門に9作品、詩部門に26作品の応募がありました。

応募作品は、芥川賞受賞作家の又吉栄喜氏を含む審査会で審査され、中から8作品が「うらそえYA文芸賞」に決定しました。

表彰式では「どの作品も借り物ではない作者自身の本当の声が表現されている。客観的な見方を鍛えるとともに良い」と、審査員講評が報告されました。講評を受け、受賞者たちは更なる創作意欲が湧き出たようでした。応募された皆さんの次なる作品への期待が高まります。



受賞作品

短編小説部門

煌賞

「サンガツの海」

輝賞

「笑顔の連携プレー」

審査員特別賞

「ある9月の午前中」

図書館長賞

「森羅図書館」(Labyrinth Library)

詩部門

煌賞

輝賞

「音」

「この世界で」

審査員特別賞

図書館長賞

「利恵子さん」

嘉数 那子さん(首里高3年)

金原 瑞人氏 読書講演会

「うらそえYA文芸賞」の表彰式の後には、法政大学教授で翻訳家の金原瑞人氏の読書講演会が行われました。

金原氏は、講演中にYA文芸賞受賞者に対し、作品の感想と助言もされていました。

講演の内容は「本は力く英語と日本語のあいだで格闘する楽しさを伝えたい」をテーマに、翻訳家になったいきさつや翻訳本を読むことで異文化に触れ、刺激を受けることができることなど、自身の経験に元談を交えながらの講演でした。



作品紹介

詩部門 煌賞 島袋 さやか

『音』

世界中の音が耳を伝う
目を閉じれば 響く音
地面に傾けば 伝わる色々な音

歩く音 書く音 鳴く音 風が吹く音
周りの音が私を伝う 生きている証の音
誰かが呼吸をしている音が伝う
全力で生きているから出来ること
今を必死に生きるから出来ること

誰かが静かに泣いている音が伝う
必死に泣く 一人で泣いている
こらえていても 体は震えている
私の心に泣く音は伝う 心を締めつける
あの子は静かに誰かを呼んでいた 助けを
誰かが手をさしのべる音が伝う
心は次第に温かくなっている 音は伝う
誰かが楽しく笑う音が伝う
あの子は今を この時間を
必死に楽しんで生きてきようとしていた
私の心に笑う音は伝う 心は音を包み込む
今を かけがえない時間という瞬間を
強く 大切に生きていること

音が世界をめぐる 人々の耳に入っていく
皆の体を音がめぐる 心を音がめぐる
音の世界を 私達は生きていく
これからも 音はめぐる 生きている限り
鼓動という音は止まらない 世界中の音

煌賞

受賞者インタビュー 島袋 さやかさん



「音」は生きていなければ聞こえないし、出すことができない。生きていることの大切さを詩にしました。表現がうまくできず、自分の満足いくものではなかったのですが、次回作は納得できるものを作りたいです。